

中学校

4度の引越しで、授業のレベルやシステムに、それほど大きな学校格差は感じなかった。どの学校も学年の初めは復習に時間を掛けているし、習う内容にもほとんどずれがなかった。子どもは戸惑う事なく順応した。

中学は、社会科の某先生が「全米の年間最優秀賞」をもらったという、校長の宣伝文句にあるように、カリフォルニア州の中で、学校の成績もまずまずだったので、そのまま地区の学校へ上がった。この2年間、多くの友人を得、絵を描く楽しみを覚たりして、のんびりと楽しい生活を送った。

高校

大きな学校区で生徒数の多い地区での高校進学に、「高校4年間は、最も大事な時期だ」と、主人は頭を悩ませた。しかし、家を購入していた事情や、子どもの友人関係を考えて、気軽に引越しできる状況ではなかった。初めて教育を後回しにした。

9年生を終える直前、長女が持って帰ってきた10年生の受講登録を見て、大騒ぎになった。Honors（通常より進んだ授業）のクラスからあぶれてしまったのだ。学校に問い合わせると、「アメリカの第二次ベビーブームの影響で、あるクラスなどは50人も生徒がいるすし詰め状態だ。それでも、予算がないので、クラスの増設の予定もない」という。10年生で取るはずだったHonorsのクラスを受けられないなら、計画していた大学進学のための受講コースから外れてしまう。大学進学への深刻な影響を考え、楽しい高校生活を送っていた長女にとって、まさかの5度目の引越しをした。

編入した高校は、HonorsやAP（大学のコース）クラスが幾つもあり、全米のトップ10にランクされるほどの学校だった。海外への交換留学制度や充実したクラス関連のプログラムもある。PTAやASB（生徒会）、クラブ活動が活発で、学校へ多額の経済援助をしている。アメリカでは、日本のシステムと違って、学校のよしあしを、学校の成績ランクと共に、このPTAとASBの力を判断の材料にするのだ。

もっと驚いたのは、学期毎に、他の子どもや親にも分かってしまう成績の発表があった事だ。高校レベルといえども、「成績で結果を出す」ことを求められる競争社会だ。第二次思春期にいた難しい年頃の長女は、教育環境が整っている事を喜ぶ反面、成績でしのごを削る人間関係に馴染めず、何度も「学校なんか辞めたい」と訴えて、親を悩ませた。

車でわずか15分ほど離れた地区への引越しで、しかも公立の高校なのに、何という違いだろう。この違いがどこから生れるかは、機会があれば別に書いてみたい。

日本の親が子どもの教育を考えるのは、公立・私立学校のどちらを、また、子どもの成績に見合った学校の選択をする時だろう。それも最後は、学校の進路指導によって決められるのが日本のシステムだ。アメリカでは、住まいと教育が直結していて、極端な格差を生む。ほとんど変わらないと思えた小・中学校の学校差も、かなりあったのかもしれない。親は「孟母三遷」の意義をここアメリカでこそよく考え、実行してなくてはならない事を、5度の引越しを通じて実感した。

大学入学半年後に、長女がくれた手紙の一文を最後に紹介しよう。

「すでに脱落しかけているまわりの人を見ると、まだ私が大学で生き残っているのは、あの高校で鍛えられたお陰だと思います。」

松本 康子（まつもと やすこ）

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の悪戦苦闘の姿を紹介させていただきます。皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？



「孟母三遷」のお話です。康子さんの孟母（？）振りよりも、親としての経験のない、外国での子育て・教育体験の紹介です。

この文章で、康子さんは淡々と三遷の経緯を述べていますが、海外で子どもの教育をすることで、親としての迷いや苦しみ・楽しみも数多くあったことは、容易に想像できます。その康子さんの心のつぶやきや叫びを聞いてみたい、と思いませんか、皆さん？